様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月　３ 日現在

機関番号：１３９０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2023
課題番号：１８Ｋ０３０９２

研究課題名（和文）共通点発見課題を用いた非行からの立ち直りプログラム作成の試み

研究課題名（英文）The recovery program for delinquents based on the commonality search task

研究代表者
河野　荘子（Kono, Shoko）

名古屋大学・教育発達科学研究科・教授

研究者番号：００３１３９２４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,800,000円

研究成果の概要（和文）：「孤独」と関係が深く、よりポジティブな印象と結びつきのある「一人でいること」を刺激語にした。本実験では、調査協力者に、「一人でいること」から連想する内容を30秒間で出来る限り多く記入してもらった後，「一人でいること」に対するイメージを11項目のSD法により測定した。「一人でいること」と「優勝」「祝福」「爽快」「幸運」のそれぞれとの共通点を回答する共通点探索課題の後、再度、「一人でいること」から連想する内容とイメージを測定した。その結果，「一人でいること」のイメージは認知課題実施後にポジティブな方向に変化していた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　認知行動療法をベースにした処遇プログラムの導入によっても、再非行が著しく減少したわけではない。研究代表者は、この問題に資するため、処遇プログラムの効果を高めるための認知課題を作成した。
　認知課題は、共通点発見課題をベースにする。共通点発見課題とは、一見関連がなさそうに見える2つの単語の共通点をさまざまに考えさせるもので、先行研究では、こういった思考法の体得が、問題解決における新たな解法の発見や新たなアイデアの生成に効果的とされている。認知科学の知見を応用して、非行少年の思考傾向に直接アプローチしようとする本研究のような試みは、国内外のどこにも存在しない画期的なものである。

研究成果の概要（英文）：The stimulus word was ``being alone.'' This was because our previous research had shown that ``being alone'' is closely related to ``loneliness,'' but that it is more likely to be associated with positive impressions than ``loneliness.'' In this experiment, participants were asked to write down as many things they could associate with "being alone" in 30 seconds, and then their image of "being alone" was measured using an 11-item SD method. . Next, the participants were asked to indicate the similarities between ``being alone'' and ``winning,'' ``blessing,'' ``exhilaration,'' and ``lucky.'' Finally, we again measured the content and images associated with ``being alone.'' As a result, the image of ``being alone'' changed to a more positive one after the commonality search task.

研究分野：臨床心理学

キーワード：非行少年　一人でいること　共通点探索課題　非行からの立ち直り

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

わが国では、2006 年以降、性犯罪者や覚せい剤事犯者など、特定の罪を犯した者を対象に、認知行動療法をベースにした処遇プログラムを矯正施設などで実施している。受講者は、非行に結びつく恐れのある自らの認知のゆがみに気づき、非行に至るような衝動を行動に移す前にコントロールする方法を学び、被害者への共感性を活性化させ、再非行をしないようにするための具体的な方法を習得する。しかし、これらのプログラムの効果検証の結果は、それほど良いものとは言えない。性犯罪者へのプログラム実施後、性犯罪の再犯率が著しく下がっているわけではないし、ここ約 20 年の再非行少年率は、大きな変化なく 30～40%を推移している。やはり、さらなるプログラムの改良や充実が必要なのは明白といえよう。

期待されるほどの効果が得られない原因の 1 つに、処遇プログラムの内容が、非行少年たちの特性を十分考慮していないことがあげられよう。非行少年の多くが、粘り強く物事に取り組むことが苦手で、考え方が硬直していて融通が利かず、短絡的な行動を取ってしまいがちであることはよく知られている。彼らにとって、ロールプレイや集団討議をすること、それによって「自らの認知のゆがみに気づく」「衝動をコントロールする方法を学ぶ」「相手の身になって物事を考える」ことを求められること、これらすべてが、処遇者側が考えているよりもはるかに困難で、難解なことなのではないだろうか。現在の処遇プログラムが目指していることは、再非行防止のために必要不可欠なものである。しかし、その目標実現のための方法論が、非行少年の特性を十分考慮したものとなっていない。特に、受講者に体得してほしい事柄と、受講者が実際に取り組んでいる課題との結びつきが不明確で、どのような状態になったら目標を達成したことになるのかがわかりにくい。他者の気持ちという抽象的な事柄を考え、それを通して「自らの認知のゆがみに気づく」「衝動をコントロールする方法を学ぶ」ためには、かなり高度な認知機能を必要とするが、粘り強さに欠け、短絡的になりやすい彼らに、目標もゴールも抽象的なプログラムにただ取り組ませても、十分にその目的を理解した上で、真剣に取り組むとは考えにくい。

では、より効果的な処遇をおこなうために何が必要だろうか。申請者は、処遇プログラム実施の前段階で、非行少年が粘り強さや思考の柔軟性を取り戻せるような認知課題をおこない、その後の処遇プログラムがより効果的に作用するための素地を作ることが必要不可欠だと考える。本研究では、再非行防止を目的とした認知トレーニングとなる認知課題を作成し、その効果検証をおこなうこととする。

２．研究の目的

非行少年は、誰かと共にいることを好む者が多いといわれる。河野・岡本(2016)は、過去に非行経験があり現在は非行をしていない立ち直り群と比較して、過去も現在も非行を続けている非行継続群は、一人でいると落ち着かなくなることが多く、その時間を楽しめないと指摘している。社会生活において他者と過ごす時間は重要である。一方で、青年期の心理発達課題に取り組むためには、他者と離れて一人の時間を過ごすこともまた重要となる。非行少年たちは、他者と離れて一人の時間を過ごすことをネガティブに捉えているために、落ち着いていられず、仲間を求めてしまうのではなかろうか。一人の時間を過ごすことを「孤独」ととらえるのであれば、それは「暗い」「寂しい」「不安」といったネガティブな印象が持たれやすい（佐藤，2018）。しかし、一人の時間を過ごすことのポジティブな側面に目を向けることができるのなら、「一人でいる」ことは、暗く寂しい「孤独」とは別のものとなるのではないか。非行少年が、一人でいる時間を「孤独」だけではなく、気分を落ち着かせ、自己の内面を充実させる側面もあるととらえられるよう心理教育することは、再非行を防止する上で非常に重要なカギとなろう。本研究では、非行少年が一人で過ごす時間をよりポジティブなものととらえられるような認知課題を作成する。

認知課題にはさまざまな理論的背景を持つものが多数あるが、本研究では、共通点発見課題(山川・清河・猪原，2017)をベースにする。共通点発見課題とは、一見関連がなさそうに見える 2 つの単語(コンロとレモン、バナナとバイクなど)を対象者に提示し、その共通点をさまざまに考えさせるものである。求められていることが明確で、ある種のゲーム感覚で共通点を探索することができる一方で、この課題を通して、それぞれの対象のとらえ直しが生じ、通常では顕在的ではない属性に注意が向けるようになることが期待できる。山川・清河（2022）は、共通点の探索をすることが、対象を普段とは異なるとらえ方で検討することをうながし、こういった思考法の体得が、問題解決における新たな解法の発見や新たなアイデアの生成に効果的だと指摘している。

共通点発見課題の考え方を用いることで,「一人でいること」が孤独に結びつくだけではなく、ポジティブな側面への着目を促すことが期待できる。ただし、個人の内面を変化させようとする処遇プログラムとの連続性を持たせるためには、少年たちの心理特性に直接働きかける認知課題でなければならない。これまでの共通点発見課題では、具体物にあたる単語が材料として用いられていたことから、「孤独」や「一人でいること」のような抽象概念や状態にもこの方法が有

効なのかについては検討が必要である。

３．研究の方法

(1)認知課題作成のための実験

「孤独」と「一人でいること」という刺激に対して、イメージする内容が異なるのかを確認するとともに、認知課題を作成するための刺激語を選定した。予備調査１で、「孤独」から連想される内容を把握し、予備調査２で「一人でいること」から連想される内容を把握した。

① 予備調査１

クラウドソーシングサービス Lancers を通じて実験参加者を募集した。その結果、18 歳以上の日本語を母語とする者で、データの使用を許可した 309 名が参加者となった。サンプルサイズは、連想頻度表を作成している先行研究（水野・柳谷・清河・川上，2011）に従って設定した。

練習試行では「友情」、本試行では、「孤独」に加えて、佐藤（2018）および山田・上山（2017）から「孤独」のイメージとして挙げられたもののうち、「黙考」「熟慮」「自由」「意思」「成長」「静穏」「安定」「安心」「大切」「集中」を刺激語として使用した。

調査は、オンライン上で行われた。所要時間は、事前および事後の説明や同意確認を含めて全体で 10 分程度である。本研究は、日本語を母語とする人を対象としていることから、事前の説明でその旨明記するとともに、同意を得た後の最初の質問で母語を確認し、「日本語以外」と回答した人および無回答であった人については、その時点で終了する設定とした。

はじめに、参加者が求められていることを理解できるように、練習試行を設けた。練習試行と本試行の手続きは同一であるが、試行数は練習試行が 1 試行、本試行は 11 試行である。具体的には、1 試行ごとの制限時間を 30 秒として、画面上に示される日本語の単語から連想する内容を回答することを求める。本試行における刺激語の呈示順は、参加者ごとにランダムとした。本試行終了後に、参加者の性別、年齢、最終学歴を尋ねた。

② 予備調査 2

18 歳以上の日本語を母語とする者 300 名を、クラウドソーシングサービス Lancers を通じて募集した。

材料と手続きは予備調査 1 と同じである。ただし、練習試行の刺激語を「友情」から「料理をすること」に、本刺激の刺激語を「一人でいること」に変更した。

(2)共通点発見課題の考え方を取り入れた認知課題による介入の効果の検討

クラウドソーシングサービス Lancers を通じて実験参加者を募集し、18 歳以上の日本語を母語とする者 183 名を得た。サンプルサイズは、G*Power を用い、効果量が中（0.25)、有意水準 5%、検定力 80%として算出した。

所要時間は、事前および事後の説明や同意確認を含めて全体で 20 分程度である。事前測定、共通点探索課題、事後測定の 3 部構成となっている。

事前測定では、はじめに、「一人でいること」に対するイメージを SD 法で測定した。記入方法を理解するための練習試行として、「料理すること」から連想される内容を 30 秒間で記述するよう求めた。その後、「一人でいること」から連想される内容を 30 秒間で記述するよう求め、「一人でいること」の印象に関する 11 項目（Oyama et al.，2008）に 6 件法で答えてもらった。

共通点探索課題では、参加者は、a)ポジティブ語共通点探索条件と b)統制条件のいずれかにランダムに割り当てられた。

a)ポジティブ語共通点探索あり条件では、回答方法を理解するための練習試行として、「レモン」と「ミカン」に共通する内容を記入することが求められた。ペアとなる単語は、木村・鈴木（2020）を参考に選定した。その後の本試行では、「一人でいること」と「優勝」「祝福」「爽快」「幸運」のそれぞれとの共通点を探索することが求められた。呈示順は、実験参加者ごとにランダムとした。b)統制群では、回答方法を理解するための練習試行として、「旅をすること」から連想する内容を記入することが求められ、その後の本試行では、「一人でいること」から連想する内容を 4 回記入するよう求めた。いずれの条件でも練習・本試行とも 1 試行の制限時間は 45 秒である。

事後測定では、事前測定と同じ手続きで「一人でいること」から連想する内容とイメージとを測定した。連想内容は、以前に記入した内容でもかまわないことを教示した。その後、参加者の性別、年齢、最終学歴を尋ねた。

４．研究成果

まず、予備調査 1 で、「孤独」という語から連想される内容を把握したところ、ポジティブな内容は上位には見られなかった（表 1)。次に、共通点探索課題で用いる刺激とするために、「孤独」のポジティブな側面との関連が強い語を選定した。各刺激語から連想された二字熟語のうち最も多かった回答を表 2 に示した。刺激語によっては、最も多く連想された内容が二字熟語ではない場合があったが、ここでは二字熟語の中で最も多かったものを抽出した。このうち、出現頻

度が高く、多くの人から特定の連想がされやすいものを、「孤独」との間の共通点を探索する刺激として使用した。また、これ以降すべての分析において、各刺激語から参加者が最初に回答した内容を分析の対象とした。

表 1　「孤独」から最初に連想された内容の上位 10 位までのもの

回答	出現頻度	割合 (N = 309)
ひとり	91	0.294
さびしい	48	0.155
死	20	0.065
独身	12	0.039
ひとりぼっち	12	0.039
孤独死	11	0.036
老人	11	0.036
さびしさ	8	0.026
孤立	5	0.016
悲しい	4	0.013
グルメ	4	0.013

表 2　各刺激語から最も連想された二字熟語

刺激語	回答	頻度	割合	N
成長	子供	103	0.336	307
集中	勉強	83	0.271	306
大切	家族	67	0.217	309
安心	安全	59	0.191	309
安定	安心	34	0.110	308
自由*	女神	16	0.052	309
意思*	疎通，決定	14	0.046	307
熟慮*	大人，慎重	12	0.040	302
黙考*	沈黙	12	0.039	308
静穏*	静寂	9	0.029	306

*二字熟語が最多ではなかったもの

次に、予備調査 2 では、「一人でいること」という言葉を刺激語として，この言葉から連想される内容を収集した。「一人でいること」から最初に連想された内容のうち、頻度が多かった上位 10 位までのものを表 3 に示した。なお，表記が異なるものの同じ音かつ同じ意味を表すものについては同一の内容とみなして頻度を求めた。「気楽」,「さびしい」「さみしい」は「さびしい」、「気楽」「気が楽」「気持ちが楽」は「気楽」、「ねむる」「ねる」は「ねる」に統一した。

表 3　「一人でいること」から最初に連想された内容の上位 10 位までのもの

回答	出現頻度	割合 (N = 300)
孤独	89	0.297
さびしい	32	0.107
読書	27	0.090
気楽	13	0.043
自由	8	0.027
リラックス	7	0.023
しずか	5	0.017
ひま	5	0.017
落ち着く	4	0.013
楽しい	4	0.013
テレビ	4	0.013
テレビを見る	4	0.013
部屋	4	0.013
楽	4	0.013

その結果、最も連想された内容は「孤独」であった。「一人でいること」と「孤独」は最も結びつきが強いことが示唆された。また、それに次いで多かった内容は「さびしい」であり、「孤独」を刺激語とした予備調査 1 と同様の結果であった。しかし、「一人でいること」に関連する連想には、予備調査 1 とは異なり、「気楽」「自由」「リラックス」「落ち着く」「楽しい」のようなポジティブな意味合いを持つものが含まれていた。したがって、「一人でいること」は必ずしもネガティブに捉えられているわけではないことが示唆された。

「孤独」はその言葉から最初に連想される内容はポジティブなものとはなりにくいが、「一人でいること」は、「孤独」と関連が強いもののポジティブな内容の想起にもつながる刺激語といえる。予備調査 1 と 2 の結果から、「孤独」のとらえ方を変化させるよりも、「孤独」より相対的にポジティブな側面を想起させやすい「一人でいること」のとらえ方の変容を目指したほうが、より実際的で、少ない負担で効果が得られるのではないかと推測された。そこで、効果検証をする認知課題は、「一人でいること」のみにした。

認知課題の効果検証は、データの不備等のない 156 名を用いておこなった。時期と条件を要因とした 2 要因混合計画の分散分析を行った結果、ポジティブな項目で時期の主効果が見られ、介入後にポジティブな方向に評価が変化していた。共通点発見課題の考え方をベースとした認知課題の介入効果が認められた。

本研究では、共通点探索課題を用いて、「一人でいること」の捉え方に及ぼす影響を検討した。本研究によって、「一人でいること」あるいは「孤独」のポジティブな側面に着目することが、不適応的な対人行動を減らす一助となる可能性が示された。

引用文献：

木村年晶・鈴木直人　(2020).　二字熟語を用いた感情喚起語リストの作成　感情心理学研究, *27*, 43-50.
河野荘子・岡本英生　(2016). 抑うつに耐える力は非行からの立ち直りとどのように関係するのか　犯罪心理学研究特別号, *54*, 166-167.
水野りか・柳谷啓子・清河幸子・川上正浩（共編著）　(2011).　連想語頻度表：3 モーラの漢字・ひらがな・カタカナ表記語　ナカニシヤ出版
Oyama, T., Ogostini, T., Kamada, A., Markovic, S., Osaka, E., Sakurai, S., Sarmany-schuller, I.& Sarris, V. (2008). Similarities in form symbolism among various languages and geographical regions. *Psychologia,* 51, 170-184.
佐藤俊一　(2018). 孤独――生を健康にするもの――　相互社会福祉研究, *22*, 45-54.
山田斗志希・上山輝　(2017). メディア表現における「孤独」と「孤独感」に関する考察　富山大学人間発達科学部紀要, *11*, 89-101.
山川真由・清河幸子・猪原敬介 (2017). 共通点の探索を通じた創造的な着眼点の発見――対象間の関連性に着目した検討――　認知科学, *24*, 314-327.
山川真由・清河幸子　(2022). 共通点の探索による「目立たない」知識の活性化の促進, 認知科学, *27,* 527-539.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計0件

〔学会発表〕　計3件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 清河幸子　河野荘子
２．発表標題 「一人でいること」のイメージ
３．学会等名 電子情報通信学会
４．発表年 2023年

１．発表者名 清河幸子　河野荘子
２．発表標題 孤独の捉え方を変える手段としての共通点探索
３．学会等名 電子情報通信学会
４．発表年 2022年

１．発表者名 河野荘子・岡本英生
２．発表標題 非行からの立ち直りのために必要な心理特性の検討
３．学会等名 日本犯罪心理学会第57回大会
４．発表年 2019年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	岡本　英生 (OKAMOTIO Hideo) (30508669)	奈良女子大学・生活環境科学系・教授 (14602)	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	清河　幸子 (KIYOKAWA Sachiko) (00422387)	東京大学・大学院教育学研究科（教育学部）・准教授 (12601)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関